（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科・2年

氏 名：荒木さくら

授業科目名	文化人類学実習１
研修先（国・地域） 滞在地	大韓民国
研修期間	2017年8月25日～2017年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回この実習で、私たちのグループは「一番街と南部市場における再開発による影響」というテーマで調査を行った。一番街とは鹿児島中央駅のそばにある商店街である。南部市場とは全州市にある市場で、その中に「青年モール」という若者向けの店が集まった場所が存在する。この青年モールができたことにより、南部市場の売り上げや客層は変わったのか、すなわち青年モールをつくるという再開発によって南部市場にどのような影響を与えたのかを調査した。南部市場に来ていた人100人に対してアンケートや、青年モールで店を営んでいる人や南部市場の代表者へのインタビューを行った。それらの調査を通して以下のことが分かった。①南部市場の利用者は高齢の方がもともと多かった。②青年モールができたことで南部市場に若者も流れてくるようになった。③売り上げも増え、青年モールをつくるとい再開発は成功したといえる。これらの調査結果を一番街に当てはめて考える。一番街の利用者も高齢者が多く、再開発の話が進んでいるという。この再開発を成功させるためには、観光地となった青年モールをきっかけに南部市場にも人が流れ込んだように、一番街にも観光地となり人を呼び込む場が必要なのではないか。人を呼び込むことができれば、一番街にも人が流れて、若者や利用者も増えていくだろう。

調査は韓国の学生と協力して行ってきた。韓国人にアンケートを行ったりインタビュー内容を韓国語から日本語に翻訳してもらったりと、韓国の学生なしでは十分な調査は行えていないはずだ。この実習で、国境を越えて協力することができたことへの喜びと、協力することの重要性を改めて感じた。大韓民国での調査は終わりだが、現場へ行き調査を行う機会はこれからもあるはずだ。この機会を忘れずに、これからも学習や調査を行っていきたいと考える。

〔研修後の抱負〕

韓国での調査を受けて、さらに疑問が出てきた部分がある。たとえば、南部市場では利用者にアンケートを行ったが、一番街では行っていないため、実際の利用者の声はどのようなものなのか、ということや、一番街の具体的な再開発がどのようなものか、ということである。これらを新たな調査課題として調べる必要がある。さらに商店街についての本や南部市場についての論文を紹介していただいたので、それらを読みさらに理解を深めていきたい。また、上記でも述べた通り、協力することの重要性を実感し、これからの学習や調査でも協力することを大事にしていきたいと考える。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部（人文学科）・2年

氏 名：鬼束　実里

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	大韓民国　全州
研修期間	8月25日～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の実習で私達Ｄ班は、韓国人の身体的技法について学習した。韓国人間で行われるコミュニケーションを明らかにするために身体的技法に注目し、目視によって調査を開始した。実習1日目は観光地ということで韓屋村に行った。2日目は、プロテスタント系であるホープ教会、韓国人学生のジウォンさんのお宅で調査を行った。そして最終日は、納骨堂と周辺のお墓、公園で調査を行った。また、晩ご飯や朝食を実習参加者で食べる際には、韓国人学生とイム先生の身体的技法に注目した。

これらの場所での調査によって得られた結果は、日本人学生の予想よりも多く集まった。そのなかでも印象的だったものについて述べていきたいと思う。まず、韓屋村で収集した、否定を表す身体的技法である。日本人は身体を使い否定を表す際には、手のひらを横向きにして左右に振る。しかし韓国では、手のひらを相手に向けて左右に振っていた。身体的技法の中でも、話の補足のために用いられるジェスチャーに分類されるものではないかと考えた。また納骨堂では、故人のお参りにいらっしゃった方に、その方法を観察させていただける事になった。韓国の納骨堂・墓地は日本のように宗教別に設けられているわけではなく、様々な宗教の方が一緒に弔われていた。およそ20㎝の高さの長方形の墓石の周りには、故人の好きだった飲み物、花などが供えられていた。お参りは、故人の好きだったものを墓石前に供え、そのうち飲み物は墓石の四隅にかけていた。また、箸で地面などを3回叩くと故人がそれを食べた合図となることも分かった。そして実習中、韓国人学生はイム先生がいらっしゃった時や帰られる時に、席を立って挨拶していたのも身体的技法として収集することができた。これらは調査結果の一部であり、実際はもっと多くの身体的技法を収集した。

私は初めての海外であり、初めての異文化体験であった。韓国と日本は地理的にも近く、歴史的背景も深いつながりを持っているにも関わらず、日本とは異なる文化が多くあったのにとても驚いた。私たちの班は、日本との比較は行わないつもりであったが、中間報告会の時に尾崎先生から「無意識的に日本との比較によって目視をしている」との指摘があった。自分たちでは気づかないうちに、比較を行っていたと分かり、異文化の中での日本を強く意識した瞬間であった。とても良い学習ができたと感じる。

〔研修後の抱負〕

これからの課題・抱負としては、実習で得られた身体的技法を言葉を用いて表現すること、日本のプロテスタント教会に調査に行くことなどが挙げられる。実習で得られた結果を、分かりやすく説明するためにはどうすればいいのか、班員全員で協力して考えたい。

また韓国で、文化人類学にとって重要なことである異文化理解についても、体系的に学べたのではないかと感じる。自分なりに異文化理解とは何かを深く考え、これからの海外研修やフィールドワーク調査で役立てたい。そして、1月に韓国人学生が日本に来る際には調査の協力者としてどのような働きをすればいいのか、韓国人学生の行動を振り返り考えたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科2年

氏 名：假屋咲紀

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（国・地域） 滞在地	韓国・全州・全北大学
研修期間	8月25日～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

８月２５日～３０日の５日間の韓国でのフィールドワーク実習を終えて、様々な成果を得ることができた。フィールドワークの計画を立て実際に現地調査を行うのは初めての経験だったが、それが韓国という異国の地であり、多くの刺激を受けた。私たちは8月２６～２９日の３日間で全州市での詳しい社会調査を行った。今回の社会調査では全北大学の大学生、またカフェで一般の方へのアンケート調査を行った。アンケートを行う中で、全北大学の韓国人学生に協力してもらい調査を行った。私たちのグループは「韓国における整形の現状」というテーマのもと各項目に答えてもらった。韓国でのフィールドワークで行う調査や過程の計画は日本で念入りに練ってきたはずであったが、韓国人学生の視点からの助言でアンケートの内容を変更して調査することになった。また、アンケート調査を実施していく中で、協力してもらう難しさに直面した。言語が違うため、詳しい説明は韓国人学生に行ってもらったがそれでも最初は断る人が最初は多く、苦戦した。しかし地道に調査を行っていくことで、３日間で約１００名のアンケートを収集することができた。

集まったアンケート結果を集計し、得られた結果から見えてくる韓国の整形の現状を考察し、まとめるのに私たちは苦労した。私たちはアンケートで多くの意見を集めることはできたものの、質より量を重視したため、表面的なものばかりで、得られた結果に対して十分な考察を行うことができなかった。私たちのスキル不足による失敗である。この失敗から、私たちは多くを学んだ。念入りな調査計画作成の必要性、データを多く取りながらも表面的ではなく深く入り込んだインタビューや観察を行うことの重要さを身に染みるほど学ぶことができた。

この韓国での実習中、様々な問題も発生し、臨機応変な態度が求められた。韓国でのフィールドワークによって帰国してから自身の成長を感じ取ることができた。 また、私はこれから韓国への留学を検討している最中である。現地へ赴き、韓国人と生きた対話ができたことが私の自信へとつながった。そして、この５日間の体験が今後の韓国語を学ぶ意欲にもなり、非常に貴重な体験をさせていただいたと思う。また、かけがえのない韓国人の友達もできた。この実習で得られたものは多すぎて整理が追い付かなかったが冷静に振り返ることで失敗したことも含め、ゆっくり自分のものにしていきたいと思う。

〔研修後の抱負〕

今回の韓国での研修を終えて、異文化の中での調査は困難であり、非常に難境であることが分かった。

文化人類学での現地調査は現地の方々の協力が必要不可欠な学問である。人と関わるということは今まで毎日何度も行ってきたことである。しかしながら、学問を通じて協力してもらうことの難しさを今回痛感した。日本の中でもそれぞれの地域、文化、方言など異文化は存在する。その異文化を受け入れ、調査を行うことが重要であると感じた。これから大学で自身が文化人類学の研究を行う際、韓国実習での経験を生かしていきたい。

そして、この経験を生かしたて、日本の異文化の中での具体的な調査を行いたい。

（ 別紙5 －2 ）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（ 学部（ 研究科）・ 学年）： 法文学部　2年

氏 名: 木田夕菜

授業科目名	文化人類学実習
研修先（ 国・ 地域） 滞在地	大韓民国　全州　全北大学
研修期間	2017年8月25日～30日

〔研修を通じて得た成果〕 今回の韓国実習では、韓国の身体技法をテーマに、私たちのグループは調査を行った。韓国の人間関係へ興味を持ったことをきっかけに設定したテーマであったが、全北大学のイム先生や学生の協力をいただきながら、飲食店や幼稚園、協会や納骨堂といった宗教に関連する場所、韓国人向け観光地などを訪れ、様々な場面における韓国人の身振りや仕草に関する情報を多く得ることができた。韓国人学生宅を訪問させてもらった際には、家庭内の日常的な身体技法も確認できた。当初は、人々の様子を観察するという調査方法のみを予定していたが、訪れた学生の家族に身体技法に関する話を直接聞くことができたことは、非常に実りある経験であったと考える。日本で文献調査をすることによって、韓国で見られる身体技法について学習することはもちろん可能であるが、それが実際に現地で行われているのかについて検証できたことは、大きな収穫であると思う。そして、学生の両親と交流を図る中で、韓国の身体技法には儒教に影響を受けたものが多いものの、時代の変遷により儒教の考え方が薄れていき、今ではそれに関係する動作も少なくなっていることを知った。身体技法の変遷についても学習し、研修後の調査結果をまとめる際に必要な視点を得られたと私は考えている。

また、現地の学生と直接的な交流を深めることができた。6日間の研修期間の多くの時間を共に過ごすにつれ、相手や相手の国の文化を理解しようとする他、自分や自国の文化をさらに理解してもらおうと積極的に話しかけることが多くなった。コミュニケーションを取る双方が、歩み寄る姿勢の重要性も認識したのである。加えて、調査を中心に行うのは私たち日本人でありながらも、絶えず助言と調査への協力をしてくれた学生たちとの日々は、調査を終えた後の大きな達成感、韓国人学生との連帯感をもたらしてくれたように思う。私は中国の上海へ渡航し、現地の人々と交流した経験がある。今回までの研修を通じて、日本、中国、韓国の3カ国の比較研究を行うことができた点においても、私にとって有意義な研修だったと感じている。現在、日本と中国、韓国との政治的な関係は必ずしも良好とは言い切れないが、実際に現地の学生と向き合うと、彼らは日本の学生と何一つ変わらない受容性と寛容性を有していることを強く感じた。メディアで伝えられる外国の姿は、あくまでもカメラのファインダーで切り取られた一部分に過ぎない。現地に自分が身を置いて初めて、相手の国の本当の姿が見えてくるのであり、そこに現地調査を行うことの大きな意味が存在しているのだと改めて認識した。相手のことを知ろうとしない姿勢や無知こそが、異文化理解に対する誤解やコンフリクト（ 紛争）を生み出しているのかもしれない。

〔研修後の抱負〕 今回の研修を通じて得られた身体技法は、後期の同授業にて、それぞれの技法が示している意味を明らかにする。そして、関係する意味ごとに技法を分類することにより、身体技法の文化的背景を理解することを予定している。加えて、調査内容を今回に比べ拡大して調査をしていきたいと考えている。具体的には、今回は日本と異なる韓国の身体技法のみを調査したため、今後は日韓共通の技法やそれに関係している文化を研究することである。観察調査という形には、人々の短時間の動きを捉える方法の他に、人々が取る動作が、ある程度時間を置いた後も同じ形で見られるか検証する方法もあると今回の研修で学んだ。新たな調査方法でも、同様のテーマで調査を行っていきたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者　鮫島　司

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科　2年

氏 名：鮫島司

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（国・地域） 滞在地	韓国　全州
研修期間	2017年8月25日　～2017年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回、文化人類学実習という講義の研修において、韓国の全州に行き現地の大学生の協力を得ながら各グループごとに決めた調査を行った。私達の班は韓国におけるアルバイト事情についての調査を行った。現地では、実際に韓国の大学生にアンケー調査やインタビューを行い、現地でしか得ることのできない生の声や意見を聞くことができた。実際に韓国に行くのは初めてであったが、それまで私自身が抱いていた韓国のイメージとは異なる部分も多々あり、驚きと発見の連続であった。さらには日本と韓国での文化の違いにも直面し、中には戸惑うものもあったが、異文化に触れるということはどういうことなのかについて改めて考えることができた。現地の大学生と私達の間では言語の違いもあり、お互いの考えていることをしっかりと伝達できるのかというのも不安要素の一つであったが、お互いが断片的な情報から相手の意思を汲み取ろうと努力したおかげか考えを伝えることにおいてはそれほど問題となることはなかった。今回の研修では、異文化に直面した時どう対応するべきか、現地で活動する際の心構えはどのようなものかなど、実際に体験しなければ得ることのできない貴重な経験をすることができた。そして、調査をする際の事前準備の必要性や、想定外の出来事に対しての柔軟な対応の仕方なども理解することができたので、今後の調査にも生かしていけるのではないかと考えた。

〔研修後の抱負〕

研修後の抱負としては、まず韓国に実際に行き多くのことを目の当たりにしてとてもたくさんの刺激を得ることができたので、その刺激を忘れることのないようにこれからの活動の一助にしていきたいと感じた。そしてこれからも様々な場所での調査も行うことになると思われるので、自分の持つ観点が必ずしも通用するとは考えずに、新しい考え方や文化に柔軟に対応できるような視野の広さを持てるようにしていきたいと思った。どんなに些細なことでも、記録に残しておくことで新たな発見のきっかけになりうるということも学ぶことができたので今後の調査では細かに記録をするようにしていきたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科2年

氏 名：柴田誠也

授業科目名	文化人類学実習１
研修先（国・地域） 滞在地	韓国、全州
研修期間	8月25日　～　8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修において、私は班員とともに「青年モールからみる地域振興」というテーマに基づいた調査を行った。青年モールというのは全州に存在する、南部市場と呼ばれる地域の中に存在する再開発された場所である。今回の4日間に及ぶ調査の内容としては、1日目に青年モール・南部市場の視察、2日目に南部市場を利用する人々へのアンケート調査及びその結果の集計、3日目は南部市場で再び視察を行い、4日目に青年モールの担当者の方へのインタビューを行うというものであった。これらの調査によって、現地で実際に調査を行ってみなければ分からない、南部市場に訪れる人々がどのような人々であるのかということ、また現在の南部市場にどれほどの人々が訪れるのかということを知り、また、再開発を行う前と行った後でどのような変化があったかということを直接現地の人に聞くことも出来た。

今回の研修における成果としては、先ほどまで述べてきたように再開発が南部市場に及ぼした影響についてその実態を知ることが出来たということがまず一つ、さらにその調査を行う上で様々な形で協力を行ってくれた全北大学の学生の方々との交流や全州に滞在する中で私が見た・感じた様々なものを通じて、自文化と全州の文化の違いを強く実感できたというのも大きな成果であったと私は考えている。日本に近い国とはいえ、私たちの文化と比較大きなギャップが存在している韓国の文化に触れることは、文化の差異が少ない国内ではあまり実感することのないであろう「異文化」について今までよりもより強く意識することにつながる。この異文化の存在を意識できるようになるということが、国内・国外を問わず、その地域に根付く文化に合わせた地域貢献や地域活性化のプランを立てることを可能にする、つまりグローカルな視点や能力を身に着ける上で必要になってくると私は考えている。そういった意味では、今回の韓国での研修によってグローカルな視点や能力を得ることが出来たといえるだろう。

〔研修後の抱負〕

今回の研修で、韓国において、再開発による市場の観光地化が南部市場の活性化につながったということが判明した。このことを地元の商店街においてはどのような形で活かしていくことが出来るのかということを、鹿児島という地域の特性を考慮しつつ、明らかにしていく。そして、鹿児島の商店街を活性化させるためには具体的にどのようなことをするべきなのか、ということについて適切な意見を提示するというのが私の研修後の抱負である。

（記入にあたっての注意）
この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細（複数頁可）に記載をお願いします。
冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。パソコンでの作成を原則とします。また、参加した研修がタイプA（地域貢献型）及びタイプBの場合は、地域貢献や地域活性化に資するグローカルな視点や能力を得たかどうか、成果を必ず記載してください。本報告書は、鹿大「進取の精神」支援基金HP及び報告書等に掲載されます。

（ 別紙5 －2 ）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

所 属（ 学部（ 研究科）・ 学年）： 法文学部・ 2年

氏 名: 高田博行

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（ 国・ 地域） 滞在地	韓国
研修期間	8月25日～30日

〔研修を通じて得た成果〕

今からこの海外研修で得た成果について述べる。まず私はB班でこの実習の中では、鹿児島の一番街と韓国全州の南部市場と南部市場の2 階にある青年モールという若者向けの施設を比較した。これらを比較した理由は、全州の青年モールの誕生という南部市場内の再開発がもたらした影響や現状などを参考にして、現在から2020年までに予定されている一番街の再開発を考察したいと考えたからである。次に、二つの内容に分けて研修を通じて得た成果について述べたいと思う。一つ目の成果は学習面や調査によって得られたものについて述べる。この場合は事前の準備の重要性と臨機応変な対応を挙げる。前者の事前の準備の重要性について詳細に述べると鹿児島の一番街における事前調査でインタビュー調査を行う際や、班で集まって話をするときに遅刻などにより話し合いなどに参加しなかったということや、研修の最終日のプレゼンテーションの発表の際に原稿の作成が曖昧で発表が満足できるものから程遠いものとなってしまい、班員や周りの方々に迷惑をかけてしまったということである。私がこの失敗を成果として述べた理由として、反省と振り返りを行うことで同じような過ちを二度と繰り返さないようにしたいと考えたからである。次に、後者の臨機応変な対応について詳細に述べると、韓国での調査において協力者の都合がつかず計画の変更を強いられた中で班の方向性を班員と話し合い、別の方法でデータを収集し結果をまとめたということである。二つ目の成果は韓国という異文化の中で得たものについてである。詳細に述べると、この韓国実習中に全北大学の学生と接する機会が多かったため様々なテーマについて会話をして多くの意見を聞く中で、日本とは異なる価値観を知ることができたとともに韓国という国や人々の考え方などについて理解を深めることができたということである。例えば、食事のマナー、文化の違い、経済、政治などが挙げられる。以上のことが私がこの韓国実習を通じて得た成果であり、今後の調査や学生生活に活かして行きたいと考える。

〔 研修後の抱負〕

私はこれからの抱負として、今後の調査をいかにより良いものにしていくかということを挙げる。その理由として、後期からはこの実習を基にした調査を行う必要性があるとともに、よりレベルの高い内容が求められると考えたからである。そのためには韓国実習での失敗を繰り返さないということ。また、韓国実習では不十分であった調査に関する情報をさらに補う必要があると考える。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部人文学科　2年

氏 名: 竹下　郁弥

授業科目名	文化人類学実習１
研修先（国・地域） 滞在地	大韓民国　全州
研修期間	８月２５日～８月３０日

〔研修を通じて得た成果〕

私がこの韓国での海外研修を通じて得た経験として、3つのことが挙げられます。1つ目は、海外へ渡航するためにどのような準備をする必要があるのかということです。海外に行くこと自体が初めての経験であったため、パスポートの作成やその他の準備をどのように行えばいいのか、知識がほとんどなく、先生方のサポートを受けながら海外渡航の準備を行いました。普段過ごしている中では海外への興味というものがほとんどなかったため、今回の実習で必要な手続きなどを経験できたことは貴重なことであったと思います。2つ目は、日本との圧倒的な文化の差です。「日本に近い」や「日本とよく似ている」と言われるような韓国でも、日本で生活しているだけではなかなか体験できないことが多々ありました。まず、食事に関することです。どこかの店でご飯を食べるときに、必ずと言っていいほどキムチや日本でいうおでんのような魚の練り物が食事とセットで出てくることです。また、ある程度の人数（私の場合は6人）で料理を頼むと、1人ひとり別々の皿ではなく、1つの大皿にまとめられて料理が運ばれてくるということです。また、食事の際には鉄製の箸とスプーンが常にセットで置かれ、汁物を食べる時には器には口をつけず、スプーンですくって食べることがマナーであったり、料理が陶器の皿ではなく鉄板や石皿で出てくることがほとんどであったりしました。晩御飯の時にお酒が出てきたのですが、日本のようにビールや焼酎、カクテル、チューハイなど様々な種類があるわけではなく、ビールと日本でいう清酒のようなお酒（韓国ではこれを焼酎と呼んでいた）の2つが一般的なお酒でした。そのビールと焼酎の銘柄はどのお店でもほとんど同じであったため、お酒に関してはかなりの独占市場であるのではないかと思いました。このように、料理1つとっても数え切れないほどのカルチャーショックがありました。次に、移動手段や道路の状況についてです。韓国では、少し距離があるところへ行くときに、ほとんどタクシーを利用していました。運賃のスタートが日本円でいうと約２８０円ほどであり、日本のタクシーと比較するとかなり安い値段に設定されているため気軽に利用しやすいからではないかと思いました。また、韓国の道路は大通りは非常に広く設定されていますが、裏通りは車が一台通れるくらいの道幅しか設定されていないような印象を受けました。大通りでは車は８０キロほどで走行していることが普通であり、日本の高速道路のような感覚でした。どちらかというと車が優先されるような傾向がみられたため、信号のない横断歩道などを渡る際には、車が来るタイミングをうまくかわさなければ道路を横断できませんでした。3つ目は、韓国と日本の就職活動への意識の違いです。私が所属していたグループでは韓国と日本の就職活動について調査を行っていたのですが、韓国における日本の就職活動との圧倒的な違いとして、学生のうちに就職活動を行うことが少ないという点が挙げられました。日本では一般的に大学3，４年生くらいから本格的に就職活動がスタートしていきますが、韓国では卒業したあとに就職活動を行い、場合によっては、就職のための勉強をするために大学を中退するというようなケースがあることが調査を行う中で浮かび上がってきたため、日本ではなかなかないものであると思いました。日本と似たような傾向としては、安定した雇用形態を求める学生が多くなっているということです。韓国でも公務員は安定しているという理由から志望する学生が多くなっているというのが現状として確認できました。これは日本の学生との大きな共通点が発見できたのではないかと思います。

韓国に研修へ行ったことで日本では絶対にできないような経験を数多くすることができました。この経験のおかげで、普段自分が日本で見ているものを視点を変えて見るということができるようになったと思います。この経験は私がこれから大学生活を過ごしていく中で非常に大きなものになると思います。

〔研修後の抱負〕

私はこの韓国での研修での経験を通して、国の間の文化の違いというものを実感しました。外国人渡航者が増加している日本で、私が経験したような外国人と日本人の文化の違いによって生じる違和感は身近なものになっていると考えます。このことからこの違和感を解消するにはどうすればよいのかや、外国人への配慮と銘打った規制が逆に日本人に対して障害を与えていないかなどを考察し、自分の身近な範囲（鹿児島大学に留学生など）のレベルでそれを解消する方法はあるのかどいうかといったようなことを考えることができるようになりたいと思います。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部人文学科　比較地域環境コース　二年

氏 名: 千々和駿

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	韓国　全州市
研修期間	8月25日～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕「日本と韓国での、大学生のアルバイトにおける意識の違い」をテーマとして、私たちの班は研究を進めた。まず日本でアンケートを作成し、それを韓国語に翻訳してもらった。アンケートは三度作り直したが、改良を進めることで、より正確な回答を得られやすいアンケート用紙の作り方を学べた。当初の計画ではアンケート調査にとどめるつもりだったが、韓国人留学生オムテヤンさんの指摘によって、アルバイトの様子の観察や、アルバイトをしている大学生や雇用主へのインタビューを行うことになった。複数の種類の調査方法を用いることで、より実情に沿った調査結果を出すことができたと思う。また、自分とは異なる言語話者へのインタビューは非常に面白い経験だった。実習の最終日に最終発表が行われたが、それに向けて、韓国の大学生へ向けたアンケート結果の解析作業を行った。アンケート用紙には10以上の項目を設けていたため、それら複数の項目を組み合わせた考察をすることができた。また、班員は日本人と韓国人が同じくらいの数で構成されていたが、皆が役割を分担しながら効率よく調査を進めることができた。

〔研修後の抱負〕

今回の実習ではオムテヤンさんに非常に助けられたので、テヤンさんがいない状況でも調査を効率よく分担して進めていきたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・2年

氏 名: 長濱心

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（国・地域） 滞在地	韓国・全州
研修期間	平成29年8月25日　～　平成29年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

研修をするうえで、まず、事前調査や準備が重要であることを改めて学んだ。海外に行くということで、メンバーとの信頼関係も非常に大切であった。上手く韓国大学生と言葉を交わせず、日本語や英語にはとても苦労した。しかし言葉の壁があっても、同世代ということもあり、この実習を通して、様々な苦労はあったものの友好関係を築けたのではないかと思う。

日本と韓国では文化や考えも多くが異なり、全てが新鮮だった。私の班はアルバイト事情についての調査だったが日本とアルバイトに対する意識や現状も相違点があり、とても興味深い実習となった。また実習の中で、もっと時間を有効利用できていたら良かったと思う。

慣れないことばかりだったが、韓国人のアルバイトに対する考え方を知ることができたので、良い経験だったし、良い実習にすることができたと思う。

〔研修後の抱負〕

韓国での調査結果をもっと考察を深め、さらに日本での調査や考察に活かしたい。それらの結果をもとに、調査することがあれば、韓国大学生とも連絡を取り、実習が無駄にならないような調査報告書を書き、まとめあげたいと考える。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・2年

氏 名: 野間口　夕琳

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（国・地域） 滞在地	韓国、全州
研修期間	平成29年8月25日　～　平成29年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修で私は、韓国人の身体技法について調査した。身体技法を見ることによって、韓国人が身体技法で表している尊敬や、慣習を調べたかったからである。

直接、韓国に行くことによって、メディアや書籍ではわからない自然な韓国人の行動を見ることができた。また、韓国人と直接話すこともできて、調査目的以外にも得ることが多かった。

韓国人には、自分とは国籍が違うというだけで異なる点や同じ点があるということがわかり、外国に以前より興味を持つことができた。

〔研修後の抱負〕

今回、韓国研修で得たデータを整理し、成果として残す。

また、この研修で新たに興味を持ったことについて、調査してみる。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部人文学科・2年

氏 名: 針原康平

授業科目名	文化人類学実習1
研修先（国・地域） 滞在地	韓国・全州　全北大学ゲストハウス
研修期間	8/25 ～ 8/30

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回、文化人類学実習1という授業の一環で韓国全州の全北大学へ研修に参加させていただきました。海外研修はもちろん、うまれて初めての海外への訪問ということで、パスポート取得をはじめ、多くの手続きを踏んで今回の研修にいたりました。初めての韓国だったので、まずは日本と違うところをたくさん見つけようと思い、カメラを片手にいろいろなものに目を凝らしました。主に韓国は日本と比べ、物価が安い場合が多い、タクシーやバスといった交通機関の料金が安い、基本的に料理の味付けが辛かったり、濃かったりするものが多い、牛肉は高級なためあまり食べない、流行りの変化による店舗の入れ替わりが激しい、美容に関して女性は特に熱心、などなど書ききれないほど多くの違いがありました。韓国滞在中は日本円の1円が韓国ウォンの10ウォンとほぼ同じだったので、ウォン表記の0を1つ消すだけで日本円として見ることができ、物価や料金などは大変比較しやすかったです。また、儒教が発達していることから、目上の人に対するマナーや接待を非常に大事にしていました。日本でも同じですが、韓国のほうが徹底している印象があり、個人的に見習おうと思いました。いいことだけでなく、あまりよくないと思う点もいくつか発見しましたが、価値観の違いによる偏見かもしれないので、省略します。

今回私たちは平成29年度前期の文化人類学実習1で韓国に行くことが決まり、せっかく全北大学の学生と交流するのであれば、学生を対象とした調査が良いと考え、「大学生のアルバイトに対する意欲・関心度」というテーマに設定しました。交流した全北大学の学生の皆さんは日本学科ということもあり、日本語でのコミュニケーションが取れ、スムーズな調査ができました。そこで感じたのが、もし日本語が通じなかった時のために基本的な韓国語を予習しておくべきだったということです。幸い日本語が通じたのでよかったのですが、話せないのが当たり前という考えでは今後壁にぶつかるのは確実だと感じました。調査の過程としては、前期の授業の段階でアンケートを作成しており、韓国人留学生の方に翻訳してもらったうえで全北大学の学生を対象に実施しました。しかしここで問題となったのが、韓国語に翻訳する段階で質問内容や回答方法に誤差が生じ、未回答の欄ができてしまったことです。結果的にすべての質問の回答数に差が生まれてしまい、良い資料とは言えませんでした。翻訳がいかに難しいかや、複数人に確認してもらうことの大切さを学びました。

私たちは今回の海外研修で多くのことを学びましたが、一番印象に残ったことは、日本人は自分を含め、自分からコミュニケーションをとるのが苦手な場合が多いということです。これは単に言語能力が低いからというわけではありません。韓国人と会話しているときに、明らかに日本人より韓国人のほうから会話を振ることが多く、日本人はそれに応答するだけということが多かったような気がします。かといって日本人はお互いが沈黙する状態が好きというわけではなく、韓国人のほうから話しかけてくれることに安心するし、うれしいです。私は外国人に限らず人と会話するときは大きなリアクションをとるよう心がけていますが、自分から話を振るというのも連続では限界があります。しかし、韓国人との会話中はほとんど沈黙になることなく、大変居心地の良い空間でした。よく日本人はコミュニケーション能力が低いといわれますが、そういわれている所以を実感することができました。今後このような機会があればどんな事柄でも会話につなげられるような幅広い知識や興味を持ち合わせていきたいです。このような貴重な経験を奨学金のおかげで最小限の負担ですることができ、心から感謝しております。今回は本当にありがとうございました。

〔研修後の抱負〕

私たちは人文学科の中でも比較地域環境コースに所属しているということで、今回の海外研修で得られた情報を日本のものと比較することが大きな目的であると私は考えています。すなわち、自分たちの調査テーマである「大学生のアルバイトに対する意欲・関心度」に沿って、今回の海外研修で調査した全北大学の学生のアルバイトに対する意欲・関心度と、日本の鹿児島大学の学生のものを比較することが今後の主な目的となります。比較地域といっても、日本の中の地域を比較するのと日本と海外の地域を比較するのとでは全く違うと思うので、そこも大きなチェックポイントです。鹿児島大学の学生にはすでに事前調査でアンケートを行っているので、後期の時間を利用してそれらを集計、比較し、新たな発見ができればと期待しています。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科・2年

氏 名：菱川貴子

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	韓国
研修期間	8月25日　～　8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

私がこの海外実習を通じて学んだことは、まず日本語が十分に通用しない環境下の中でいかに自分の必要なデータを入手できるかということだ。韓国の学生と合同で相手に自分たちのやりたいことや目的について伝えて情報を共有するのも困難を伴うものだったが、その上で海外の現地の方々へのインタビュー等を行う際に、どれだけ端的にかつ必要なデータを得ることが出来るか考え、自分のスキルアップに繋げる事が出来た。また、韓国に実際に赴きフィールドワークを行う前に、日本で事前調査を十分に行う大切さも学ぶ事が出来た。限りがある日程で現地で調査を行うためには、現地での日程の倍以上の準備や知識の取得が必要になると実感したからだ。

さらには、一連の研究に対して、限定的な見方でしか考えることが出来ていなかったことを実感した。ある現象が発生する要因として考えられるものは一つだけではなく、様々な要素が複雑に絡まって発生していることもある。

研究や調査に対しては多角的な観点と多くの分野の知識が無ければ、その現象の発生した結論に至ることは出来ないと学ぶ事が出来た。

〔研修後の抱負〕

今後の抱負としては、これから自分の興味のある研究を行う際に事前調査として関連する知識をできるだけ多く取得することと、さらにはそこから考えられる研究の結論まで推測した上でフィールドワークを行ったりアンケートやインタビューなどの実際の状況を調査する方法に慣れていくことだ。また、興味のある分野だけでなく、様々な知識を大学で学び、多角的な視野から物事を考えることが出来るようになる。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）：法文学部人文学科2年

氏 名：藤元美菜子

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	韓国
研修期間	8月25日～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回の実習が始めての海外渡航だったため実習前も多くの不安があった。しかし韓国に行って実際に現地の大学生とかかわっていくうちに杞憂だったとわかった。現地の学生とグループ学習を進めることで日本での話し合いだけでは気付けなかったこと、実際韓国で生活している彼らにしかわからないことなどをアドバイスしてもらうことでよりよい調査をすることができた。また私たちがあまり韓国語が話せない中、現地の学生は日本語がとても堪能で話し合いもスムーズに進み、私ももう少し韓国語を学んでから実習に望めばよかったと反省させられた。アンケート調査においても現地の学生のバックアップもあり韓国語で直接アンケートのお願いをすることができたのもよい経験になったと考える。

また5日間ではあったが日本ではない違う文化に触れたことでより個人の価値観や習慣などを尊重することの大切さを学び、今後の日常生活の見直しにもなる学びが多くあったので日本でのこれからの生活を見直す機会にもなった。

〔研修後の抱負〕

後期の文化人類学実習2では韓国で調査した結果と韓国の学生からのアドバイスを元に日韓比較をまとめていきたいと考える。

また、今回韓国での実習があったことで海外に対しても興味が持て、自分の学問の幅を広げることができた。今後の大学生活においての研究にも生かして生きたいと考える。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部人文学科比較地域環境コース文化人類学ゼミ2年

氏 名: 水溜友希

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	大韓民国・全州市
研修期間	8月25日～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の韓国全州市にある全北大学への6日間に及ぶ実習で、私たちは「韓国における様々な身体技法」について、目視による観察調査を中心に行った。実際に観光地であり人の多く集まる韓屋村、全北大学の学生の実家（家族とのやりとりを観察するため）、プロテスタント教会、納骨堂、墓地、食事の席にて観察を行い、それぞれの場所で様々な身体技法をキャッチすることができた。特に食事の席や飲みの席では多くの身体技法をキャッチすることができ、例えば、目上の人が居る席では目上の人から見えないように、背を向けて手で口を隠すように飲んだり、乾杯時には目上の人よりもグラスを下げたり、基本的に食事の際には皿を持たずに食べたりなどが挙げられる。今回の韓国実習において私たちが目視でキャッチできた身体技法の総数は30近くに及び、帰国後に「身体技法として成立しているか」という視点を持ちつつ行動を分類分けしていく。分類分けには感情表出の研究を行っていた心理学者のエクマンとフリーゼンの身体動作の5分類を参考にする。

また日本人と韓国人の比較に関しては今のところ考えていないが、日本人に比べて韓国人は人目を気にしない傾向にあると考える。街中では日本では考えられないほどほぼ全部のカップルがスキンシップをしながら歩いていたり、会話の声が大きかったりなど、このような我々日本人の目にとまる行動は国民性の差に要因があると思われる。そして、日韓比較はしないという考えで韓国にて観察調査を行っていたが、我々日本人の目にとまる行動をキャッチしている時点で無意識に比較をしてしまっているということを思い知らされた。他国の人と接しているだけで日本人というフィルターを自然と通してしまっていたのである。今回の調査においてはとても重要なことではるが、調査を除いて接したときにこういうフィルターを通して人々の行動を見てしまうのはグローバルな世の中を生きる上で弊害になりかねないと感じる。韓国にて観察調査を行えたとともに、グローバルな視点・思考の持ち方を少しでも学習できたことは、韓国実習の成果であると考える。以上が私の今回の実習における成果である。

〔研修後の抱負〕

今回私個人として初めて海外に行くのと同時に、初の海外実習で思うようにいかない場面も少なくはなかった。さらに海外の土地や人々に対して少し構えていた部分もあった。しかし、この韓国実習を通してそのような感情はすっかり消えてしまったように思える。これからは積極的に海外の方々にもコミュニケ―ションをとっていき、様々な国を訪れてみたいと考える。また海外だけに留まらず、今まで関係を持ったことのない分野や人々に対しても関与していき、自分の中で新しい発見を見つけることができるようになりたい。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部(人文学科)・2年

氏 名: 本嶋太貴

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	韓国・全州
研修期間	2017年8月25日　～8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

研修を通じて得た成果として、まず、事前学習の大切さを学んだ。私達は、個人で実習を進めるのではなく、グループを作って、グループで学習を進めていった。テーマは「就活」についてのものであったが、韓国実習に臨むにあたって、何度も皆で集まり、調査や話し合いを重ねていった。その調べた項目や内容について、毎週発表していって、先生方の指摘をいただき、また「就活」について深く調査を進めていった。このようなことを繰り返して、韓国実習に臨んでいったのであるが、実際に韓国に行って現地で調査を進めていくと、事前に調査したこととは違う内容のことも出てきて、上手くいかないこともあった。しかし事前にしっかり調査をしていたからこそ、現地で上手くいかなかった時に、迅速かつ適切に対応することができたと考えている。また、事前に学習を行っていないと、現地に行ってからやることが多くなるので、短い実習の中では厳しくなるのである。このような点から、私は、事前調査の重要さを学んだ。

他に研修を通じて得た成果としては、韓国人の友人を作ることができたことである。現地で調査を進めていくにあたって、私たちは、韓国人学生の協力のもと、実習を進めていった。このように韓国人学生と調査を進めていく中で、もちろん仲も深めていったのである。また、現地の韓国人学生達は皆、日本語学科の生徒だったので、あちらの学生からしても、日本語の勉強になったであろうと考えている。来年の1月には、韓国人の学生達が、鹿児島にくるのでしっかりサポートしていきたいと考えている。

最後に研修を通じて得た成果として、日本と韓国の文化の違いを肌で確認することができたことである。。日本と韓国の文化の違いで例を挙げてみると、日本では食事の際に最後まで食べ物を残さずに食べるのであるが、韓国では食事の際にほとんどの人が、最後まで食べ物を食べつくすのではなく、ある程度残していた。このような韓国人の振舞い方を今までは、中国人だけがするものだと考えていたが、今回実際に目の当たりにしたことで、新たな文化の違いを発見することができた。文化というものは、比較して初めてわかるものであるので、非常に良い機会を今回は得られた。

〔研修後の抱負〕

まずは、現地での調査で得られた情報を整理して、事前に予測していたものと合致した点と、そうはならなかった点とで明らかにし、原因・理由を考察していきたい。また、今回調査した「就活」は、私たちが将来的に行っていくものであるので、自分達が就活を行っていく際に、今回得られた情報を上手く活用して、就活の役に立てていきたいと考えている。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部　３年

氏 名: 坂上由莉

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	韓国　全州　全北大学校
研修期間	2017年8月25日～2017年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

韓国は、日本と隣国であるためあまり文化の違いはないと思っていたが、食材や飲食店での暗黙のルール、マナーなどが異なっていた。韓国では、お椀をもって食べることや箸を食器の上に置くのはマナーが悪いとみなされる。日本では、それがマナーであり日常的に行っていることであるため、韓国ではマナーが悪いと教えてもらったが、すぐに改善することができなかった。このとき、私は日本文化が染みついた日本人であると感じた。私は、いままで海外に行ったことがなかったため、国単位の異文化体験を実際にしたことがなかった。また、日本と文化が似ているとよくきいていたので、無意識に先入観を持ったままであった。そのため、様々な状況下で異文化体験を行うことができ、異文化と自文化を認識することができた。

私はCグループに属しており、2017年の前期の授業から若者の整形について調査をしていた。今回の実習で、現地調査を行った。紙とインターネットによるアンケートで調査を行い、合計100人のデータを集めることができた。アンケートでは、整形をすることに関する意識調査や整形の経験について、整形をしたいかどうかについてなどを問うた。すると整形をしたことがある男性はいなかったが、女性は数十人いた。主に目を整形している人が多く、きれいになりたいから整形をした人が多く見られた。また、韓国人の学生から、友達同士で整形の情報を共有することは韓国ではあると聞いた。アンケートの回答結果から、韓国は、日本よりも整形に対して幅広い考えをもっており、整形をすることを隠すという行動はあまりないようであることを学んだ。

今回の研修では、私たちのテーマ「若者の整形」に関する現地調査を行い、その結果から整形に対する考え方を理解した。また、食事の際や買い物の際などで異文化体験をし、異文化だけでなく自文化を認識することができた。

〔研修後の抱負〕

現地で集めたデータを再度グラフ化し、韓国における若者の整形事情について分析する。また、文献をもとに考察を行っていく。

（別紙５－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部人文学科3年

氏 名: 吐師　瑛美

授業科目名	文化人類学実習
研修先（国・地域） 滞在地	大韓民国　全州　全北大学校
研修期間	2017年8月25日～2017年8月30日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の韓国実習で私たちの班は、最終的には日本との比較を行う目的で韓国の整形事情について調査しました。まず行ったのは全北大学の韓国人学生の協力をもとに、日本で作成してきていたアンケートの内容を改良することでした。どのような質問項目を設ければ私たちの調査に必要な情報が得られるかを考え直し、アンケートを分かりやすく作り替えました。その後はカフェなどの人が集まる場所へ出向き、実際にアンケートを手渡してその場で回答していただきました。初めはアンケートを行う方に対して韓国人学生にアンケートの内容を説明してもらい、私たちは挨拶をする程度でした。しかしだんだん慣れていくうちに、私たちも覚えたての韓国語でアンケートに協力して頂きたいということを説明し、日本人だけで積極的に韓国人に話しかけることができるようになりました。私にとっては初めてのフィールドワークだったため、異国の地で知らない人に対してアンケートを行うというのは、とても新鮮で良い経験でした。アンケートの結果は予想外なことばかりで、やはり私たちが一般的に持っているイメージと実際の状況にはかなりの差があるということに気づかされました。また五日間の調査に毎日朝早くから遅くまで協力してくれた全北大学の学生との異文化交流も、非常に良い機会でした。毎日時間を一緒に過ごすことでお互いに韓国の文化や日本の文化を教えあったり、日本語や韓国語を教えあったり、普段生活する中では経験できないようなことばかりでした。韓国人の学生がよく訪れるという大衆食堂にも連れて行ってもらい信じられない安さで韓国の伝統料理を食したり、日本で韓国料理ときいてイメージすることのないような珍しい料理にも挑戦してみたりしました。調査だけではなくそのような異文化の体験も今回の実習の大きな成果なのではないかと考えます。カフェで日本と韓国の整形事情について何時間もお互いの意見を交換をしたりそれをまとめたりしたことも印象深いです。全北大学の学生の皆様との交流があったからこそ調査もスムーズに進み、いい結果が得られ、先にも述べた通りの有意義な研修になりました。

〔研修後の抱負〕

今回の研修で行ったフィールドワークを通して、私たちの研究テーマである整形について調査をするうえでの課題を発見しました。それはアンケート調査よりもインタビューによる調査をした方がより有力な情報を得られるのではないかということと、私たちの班はもっと文献調査を行うべきであるということです。整形というセンシティブなテーマだったためアンケート調査を選択しましたが、後期の授業やこれから卒論の研究においてフィールドワークを行う際は積極的にインタビューによる調査を実施しようと考えました。引き続き調査に励みます。